

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：21501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2023

課題番号：16K20798

研究課題名（和文）はじめて親になる男性が親としての自信を高めていくための看護実践ガイドライン開発

研究課題名（英文）Nursing Practice Guideline Development to Enhance the Confidence of First-Time Fathers

研究代表者

渡邊 礼子（WATANABE, REIKO）

山形県立保健医療大学・保健医療学部・助教

研究者番号：20737415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：はじめて親になる男性の親を対象とし、子どもが生まれてから3.4か月、6.7か月、12か月の時期における親としての自信の特徴と、親としての自信を高めた経験と阻害した体験を明らかにした。3.4か月は7名、6.7か月は9名、12か月は7名の父親から協力が得られた。親としての自信のひとつには、育児技術ができるという特徴があり、親としての成長とともにさまざまな育児ができるようになり、子どもと2人で過ごす時間にも困ることがなくなる、という変化していた。子どもの月齢に合わせた父親への看護介入の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが子が生まれてからの1年間の、それぞれの時期における親としての自信の特徴と、親としての自信を高めた経験と阻害された体験を明らかにすることができた。この結果により、はじめて親になる男性の自信を高める支援は、一度きりではなく継続的かつ段階的な支援が重要であることが示唆された。作成中のガイドラインを用いることにより、分娩施設だけでなく、行政や地域でも父親に対する支援を展開することが可能となる。また、その人らしさを大切にされた子育て支援が可能となり、育児不安による虐待の予防にもつながると考える。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the characteristics of first-time fathers' confidence as parents during the third to fourth months, the sixth to seventh months, and the twelfth month after their first child was born, as well as experiences that built or hindered their confidence. The numbers of participating fathers were seven in the third to fourth months, nine in the sixth to seventh months, and seven in the twelfth month. Findings indicate one source of parental confidence as their ability to demonstrate childcare skills. As first-time fathers grew into their roles, they became capable of handling various childcare responsibilities and no longer worried about spending time alone with their child. These findings suggest the need for nursing interventions for fathers based on their child's age in months.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：はじめて親になる 親としての自信 父親 体験

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

厚生労働省は、少子化対策の一環として、次世代育成支援対策推進法を平成 15 年に策定し、父親が子育てに喜びや責任を認識できるように、積極的に育児休暇を取得するよう働きかけてきた。依然として男性の育児休暇取得率は低いが、「家事や育児に今以上に関わりたい」と考えている男性は増加しており、日本人男性の育児に対する意識は変化している。その一方で、父親は育児参加の具体的方略がわからず悩んでおり、仕事のために十分関われないという葛藤を抱えていることや、子どもとの接し方に自信が持てない父親の割合が増加していることが明らかになっている。

親になることに関する先行研究は、母親を対象にした研究が多く、父親に視点を当てた研究は、わが国では 1990 年代から始まった。また、父親は、母親の育児や家事をサポートする立場として捉えられることが多く、父親自身が育児の主体者として捉えられるようになったのは近年になってからである。父親の育児ストレスの要因には育児への自信のなさがあるが、男性の親としての自信について、詳細に明らかにした研究は確認できない。本研究者はこれまで、はじめて親になる男性の早期新生児期のわが子と関わることによる経験と、面会の頻度や夫婦間のコミュニケーション、親の人格発達などの要因との関係性を明らかにしたが、早期新生児期において、親としての自信を語る者はいなかった。

### 2. 研究の目的

本研究は、はじめて親になる男性の親としての自信に焦点を当て、わが子が生まれてからの 1 年間の、それぞれの時期における親としての自信の特徴と、親としての自信を高めた経験と喪失した体験を明らかにし、その結果に基づき、「父親としての自信を高めていくための看護実践ガイドライン」の開発をすることとする。それにより、現在の父親に対する看護のあり方を再考する手懸りとなり、臨床のみならず、地域で看護支援している専門職に看護実践の方法を提供することができる。

### 3. 研究の方法

#### 1) 研究デザイン

質的記述的研究

#### 2) 研究対象者

はじめて親になった男性で、かつ妻・パートナーが初産である者で、研究協力を同意が得られた者、日本語での会話が可能であることを条件とし、子どもが先天性奇形や染色体異常、重篤な障害を持つ場合は除外した。

#### 3) データ収集方法

データ収集期間は 2020 年 10 月から 2021 年 9 月。自治体に文書と口頭で研究協力の依頼をし、承認の得られた市町村の 3~4 か月児健康診査・9~10 か月児健康診査を受診した児の夫婦に、研究者本人が研究協力依頼文書を用いて、研究の目的、方法および倫理的配慮について説明し、本研究に関心のある父親に連絡先を教えてください。母親 1 人で来所した場合は、父親用の研究依頼文書を父親に渡してもらい、連絡先を教えてください。また、保育所等に研究協力の依頼をし、承認後に施設内にチラシを置かせていただき、本研究に関心のある方から研究者に連絡をください。連絡をいただいた場合は、児の月齢を確認し、研究の目的、方法および倫理的配慮について説明した。面接可能な日程にプライバシーを確保できる場所で、研究協力の同意を得て、インタビューを実施した。3.4 か月、6.7 か月、12 か月の各時期において、「親としての自信にはどのようなものがあるのか」、「親としての自信が高まった体験の内容」、「親としての自信が阻害された体験の内容」の 3 点について包括的な質問で問いかけ、その返答から具体的な内容を語ってもらった。インタビュー内容は、研究協力者の承認を得て IC レコーダーに録音した。インタビュー後は、次の時期のインタビューへの協力の意思を確認した。

#### 4) データ分析方法

録音したインタビューデータから逐語録を作成した。各時期のデータを繰り返し読み、意味のあるまとまりを抽出しコード化を行った。コードの意味内容の類似性・相違性に従ってサブカテゴリーを抽出した。さらにサブカテゴリーの類似性・相違性に基づき抽象度を上げ、カテゴリーとして抽出した。

各時期での「親としての自信にはどのようなものがあるのか」、「親としての自信が高まった体験の内容」、「親としての自信が阻害された体験の内容」を比較し、生後 1 年間で親としての自信がどのように変化していったのかを検討した。分析の過程において、分析の妥当性を高めるために母性看護学領域・助産学領域の研究者にスーパービジョンを受けた。

#### 5) 倫理的配慮

本研究は、公立大学法人山形県立保健医療大学倫理委員会の承認（承認番号 1811-23）を得て実施した。

研究対象者には、研究参加は自由意志であること、協力の可否や研究協力撤回による不利益は

生じないこと、個人情報の保護、データの保管方法、研究結果の公表について、口頭および書面にて説明を行い、同意書への署名を持って同意を得た。

#### 4. 研究成果

##### 1) 対象者の概要

同意を得られたのは、のべ 23 名の父親であった。3.4 か月では 7 名で、平均年齢は 32.5 歳 (SD 5.4、最大 45 歳、最少 27 歳) であり、妻の平均年齢は 30.5 歳 (SD 3.6、最大 38 歳、最少 27 歳) であった。6.7 か月では 9 名で平均年齢は 33.8 歳 (SD 5.7、最大 44 歳、最少 27 歳) であり、妻の平均年齢は 32.2 歳 (SD 3.8、最大 38 歳、最少 27 歳) であった。12 か月では 7 名で、平均年齢は 34.1 歳 (SD 4.4、最大 44 歳、最少 30 歳) であり、妻の平均年齢は 31.7 歳 (SD 3.9、最大 39 歳、最少 28 歳) であった。

##### 2) 親としての自信の変化

縦断的に分析した結果、「親としてできることが増える」という体験があり、12 か月までに変化していた。3.4 か月ではひとつの育児技術ができるようになることが自信につながっていたが、6.7 か月ではできる育児技術が積み重なり、バリエーションが増え、子どもの世話が一通りできるようになっていた。12 か月では育児技術の質が上がり、子どもと 2 人で過ごす時間で困ることがなくなっていた。また、できないことがあることも割り切り、柔軟に妻と共に子育てをするという変化があった。

##### 3) 親としての自信が高まった体験

3.4 か月時の子どもが自分の行動により寝てくれるという体験は、子どもの欲求が読み取れるようになり、子どもの月齢に合わせた自分の働きかけから子どもの成長を感じるというポジティブな体験へ変化していた。

##### 4) 親としての自信が阻害された体験

自分ができないことを感じるにより自信が阻害されていた。12 か月を通し、父親は母親に対し子育てに関する意識の差や申し訳なさを感じていた。

##### 5) 考察

はじめて親になる男性の自信を高める支援は、継続的にかつ段階的な支援が重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------